

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：平成 19 年～平成 20 年
課題番号：19592607
研究課題名（和文） 認知障害のある高齢者ケアにおける看護師の意思決定
研究課題名（英文） Nurses Decision Making in the Care for Elderly Patients with Cognitive Impairment
研究代表者
坂口千鶴 (SAKAGUTI TIDURU)
北里大学・看護学部・教授
研究者番号：60248862

研究成果の概要：

看護師は患者の不穏行動に対して家族からの情報や患者の行動の意味を推察することによって患者の意思に添った安全で安心を提供する対応を行っていたが、夜勤帯では安全と患者の意思との狭間で苦慮し、最終的に安全維持のために家族の協力を得るか、あるいは許可を得て抑制を選択していた。しかし、抑制も安全への看護師の負担感を軽減することには至らなかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	400,000	120,000	520,000
20 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：医歯薬学

科研ひの分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：認知障害 高齢者ケア 看護師 意思決定

1. 研究開始当初の背景

看護師の意思決定は、患者の合併症の予防、身体的・心理的機能の向上等、退院生活の調整に大きな影響を与え、ケアの質の向上、医療コストの削減につながると言われている。しかし、臨床での認知障害のある高齢者をケアする際の看護師の意思決定に関する研究は、国内外において非常に少ない。

2. 研究の目的

看護師が認知障害のある高齢者の意思に対して葛藤を感じる際に、どのように高齢者の状況を捉え、どのように意思を理解し、どのような判断でケアを実施するのかその意思決定プロセスと、そのプロセスに影響する要因について調査をすることである。

3. 研究の方法

総合病院に勤務し、認知障害のある高齢者をケアした経験のある看護師 20 名を対象に、平成 18 年 12 月から平成 19 年 4 月末にかけて約 1 時間程度の半構成的面接を行った。データ分析はグランデッド・セオリー・アプローチを参考とした。

4. 研究成果

看護師は患者の不穏行動に対して、行動の意味を考え、その意味に添った判断で、安全で安心な対応をしていた。しかし、夜勤帯では患者の安全と安心との狭間で苦慮し、最終的には安全の維持のために、家族の協力や家族に許可を得て抑制を選択したが、決して看護師の精神的負担感が尽きることはなかった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

(今年度中に投稿予定)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織
(1)研究代表者
坂口千鶴

(2)研究分担者

(3)連携研究者